

越谷の歴史解明に役立つ石仏ベストテン 加藤 幸一

1. スナツカラ地蔵のルーツは水元公園！

「スナツカラ地蔵」とは、「花田のお地蔵さま」のことを言い、花田村の北東に流れる古川（昔の元荒川筋）の砂の河原（「すなつから」）のそばの土手堤にあった。このあたりは大きく開発がされたために現在その名残はない。このお地蔵さまには次のような伝説がある。

昔、元荒川が花田村を囲むように東凸に迂回して流れていた頃の話である。ある日、この曲流した花田の元荒川を



【裏側】為源海三十三年菩提也

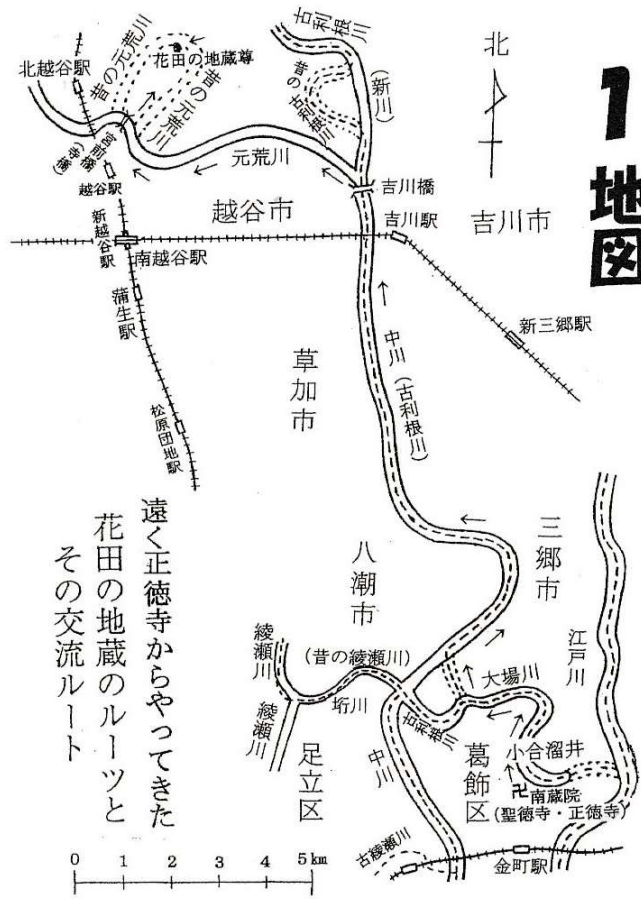
承応四年
乙未
正月廿六日

為源海菩提也

石のお地蔵さまを運んで上流へと上る舟があった。ところが、花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれて来たこのお地蔵さまがこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし堤に上げてお祀りしたという。

この地蔵尊は江戸時代初期の承応四年（一六五五）に作られたもので、裏側には「為源海三十三年菩提也 承応四年 乙未 正月廿六日」、台石側面には「武州葛西領 東葛西之庄上ノ割下小合村 正徳寺 施主敬白」と刻まれている。すなわち三十三年前に亡くなった源海の三十三回忌の菩提を弔って承応四年に武蔵国下小合村（現・葛飾区東水元二丁目付近）にある正徳寺（現・南蔵院の場所）が施主となって作られ、正徳寺から武蔵国花田村に送られて来た（I地図）。源海は、正徳寺の山号「金海山」の「海」の一字を取って名付けられた僧侶であると思われる。下小合村の正徳寺と花田村との縁を取り持つ源海は、花田出身者ではなかったかとの穿った考え方もできる。

1 地図



遠く正徳寺からやってきた
花田の地藏のルートと
その交流ルート

この水元公園を含む葛飾区はかつて下総国に属していたが、江戸幕府が作成した正保元年（一六四四）の『正保改定図』によると武蔵国に編入されていた。その後には作られたこの石仏は、承応四年に武蔵国になっていたことを示す貴重な資料であり、同様に東葛西領が上之割（葛飾区側）と下之割（江戸川区側）とに分割されていたことも裏付けられる。

2. 昔は「埼玉郡」ではなく「葛飾郡」!

この万治三年（一六六〇）に作られた如意輪観音像の石

2



仏には、「武州葛飾郡新方荘平方村」と刻まれている。「武州（武蔵国）埼玉郡新方領平方村」のように「埼玉郡」とすべきなのに、江戸時代以前の名称である「葛飾郡」としている。かつて下総国葛飾郡だった平方村を含む古利根川の右岸から元荒川の左岸にかけての地域が、室町時代に下総国から武蔵国に移行したにもかかわらず、中世の名残の「葛飾郡」の名称がその後も庶民の間に受け継がれていたことが判明したのである。

また「新方領」と言うべきところを「新方荘」と荘園の名前で刻まれているのも中世の名残である。

3. 新方荘は西と東とに分かれていた!

この寛文五年（一六六五）の百堂巡礼塔には、「西新方」

3

奉造立石佛者 爲百堂 須札庵中七十二 逆修也 本願



武州西新方

施主 敬白

の文字が見られる。新方荘は、北は春日部市に流れる古隅田川、東は古利根川、西は元荒川、南は古利根川と元荒川が合流する現在の吉川橋などに囲まれた地域である。石仏の表面に見られる「西新方」との文字により、ここ間久里地域は新方荘でも西に属し、「西新方」という呼び名であったことが判明した。大沢香取神社境内にある天和二年（二六八二）の hands 鉢にも「西新方」の文字が刻まれている。一方、「東新方」とは現在の新方地区を含む地域を指すと推測される。

なお百堂巡礼とは、周辺の百の神社仏閣のお堂巡りを言い、江戸初期の寛文年間前後に埼玉県東部から千葉、茨城にかけて行われた。

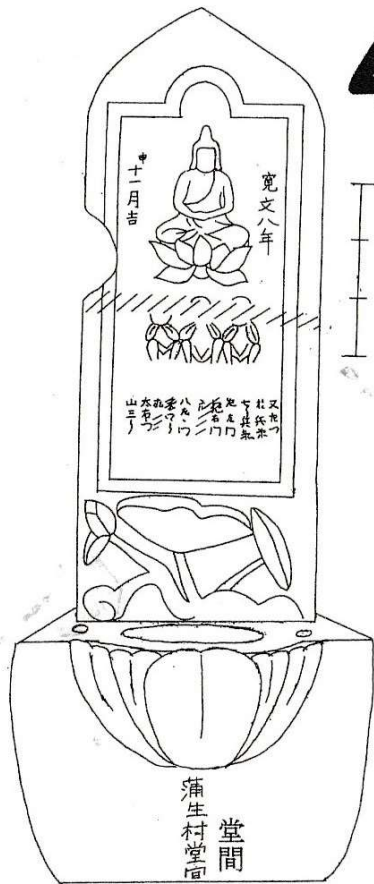
4. 蒲生にある「道沼」の地名は「堂の間」がなまったもの！

この寛文八年（一六六八）に作られた三猿が描かれた石仏は庚申塔といえる。

この石仏の台石には「蒲生村堂間」と刻まれている。つまりここ道沼は、江戸時代初期は「堂の間」と呼ばれていたことが判明した。その裏付けとして、蒲生近隣の他村の古老の中には道沼のことを「どのま」と呼ぶ人もいたという。「堂の間」が「どうぬま」「どのま」と変化したのであろう。

また台石の向かって右側面にはこれを奉納した村々の名前が刻まれているが、その最初の村には「奉行□（地）村」と刻まれている。蒲生の奉行地と呼ばれた地名は江戸時代の中頃（宝暦十二年）に誕生したとの説があるが、この石仏の年代により江戸時代初期には既に誕生していた古い地名であることが判明した。

4



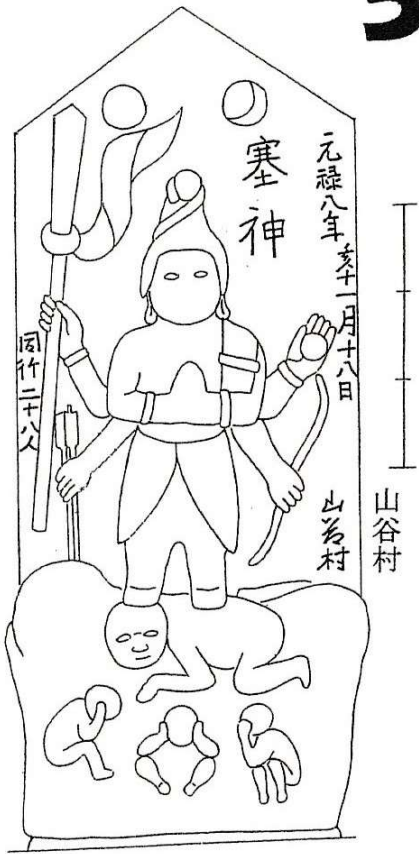
「台石の側面」奉行□村

なお庚申塔とは、六十日に一回やってくる「庚申」の日の夕方に人々は一堂に会して庚申さまを拝み、飲食して徹夜した。この庚申行事の記念として建てられたものである。

5. 「上谷」は昔は「山谷」と呼ばれた!

この元禄八年(一六九五)に作られた青面金剛像が描かれた庚申塔には「山谷村」の文字が刻まれている。現在、「上谷」と呼ばれているこの地域は、江戸時代は石仏に刻まれたとおり「山谷村」であり、その後「上谷」と改称したことが判明した。昔は「山谷」と呼ばれていたことが地元には伝わっていない。

なお山谷というところ、西方村にも「さんや」(江戸時代の『新編武蔵風土記稿』は「三谷」、明治の『武蔵国郡村誌』は「三谷」、現在は「山野」と表記)と呼ばれる地域がある。現在の相模一丁目あたりである。東方村に属していたこちら



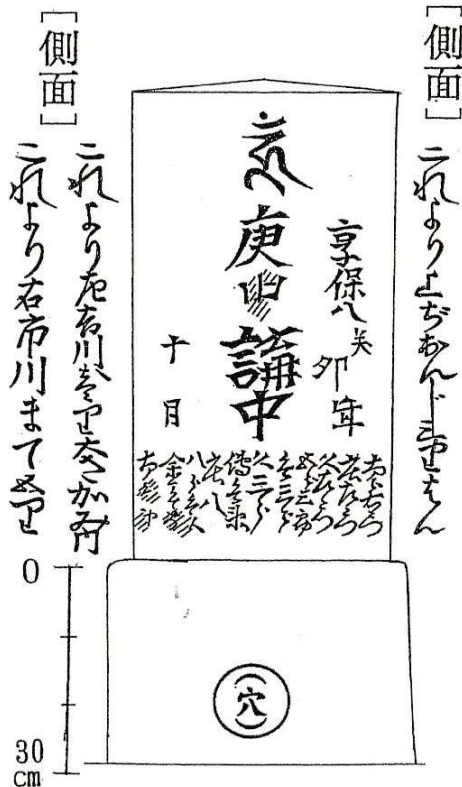
の山谷では、西方村に属する三谷と同じ読み方のために明治時代の中頃に「上谷」と改称したと考えられる。

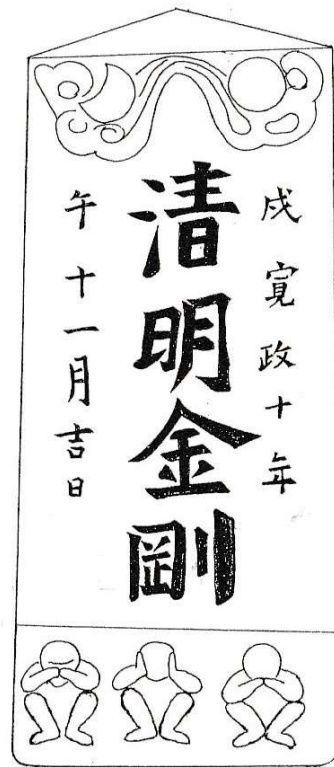
6. 昔、越谷は市川と交流があった!

この享保八年(一七二三)に作られた庚申塔には「これより右 市川まで(迄)五里」との道しるべが刻まれている。越谷と千葉縣市川との交流があったことが判明した。

ここから市川へ行く道筋は、この谷古田用水路の東側に流れる東京葛西用水路に沿って南下し、現在の千住五丁目日光街道から分かれてやってくる水戸佐倉道と合流して市川へと進んだと考えられる。

なお「市川」の他に「これより上(元荒川の上流) ぢおんじ(慈恩寺) 三里はん」「これより左 吉川へ壱里 大さかみ(大相模)内」と刻まれた道しるべの文字も見られる。





7. 青面金剛は「しょうめんこんごう」の他に「せいめんこんごう」とも呼ばれた！

寛政十年（一七九八）に作られた三猿さんえんのあるこの庚申塔には、庚申さまの至尊を本来ならば「青面金剛しょうめんこんごう」と刻むべきところを違った漢字を当てて「清明金剛」と刻んでいる。これは「せいめんこんごう」と読める。「青面金剛」のこゝとを訛つて「せえめえこんごう」と地元では呼んでいたのであろう。それゆえ「青面」を地元では「しょうめん」ではなく「せいめん」と読んでいたと判明した。庶民にとつては「しょうめん」と読むと「正面を向いた仏様」という意味に取りやすかったと思われる。

なお「清明金剛」の「清明」は「天下和順日月清明わじゆんじつげつせいめい」という言葉に由来していると考えられる。それを示すかのように、上部には日月の図が描かれている。

8. 越谷市新川町方面は「槐新田」と呼ばれた！

この元治二年（一八六五）に作られた道しるべの石塔の正面には「槐新田江 一里」と刻まれている。この石塔は、本来は旧・日光街道と岩槻道の追分おひわけ（旧・出羽堀に架かる蒲生橋、昔は出羽橋と称した所）にあったもので、現在の新川町方面が槐新田と呼ばれていたことが判明した。

「槐戸村」は現在の草加市八幡やわたにあり、それに対してこの「槐新田」（新田槐戸村とも称する）は越谷市新川町方面にあったのである。

天和三年（一六八三）の『越谷神明縁起』によると「七左新田と謂う」、槐新田と称するは誤れり」としている。七左衛門新田（七左新田）の俗称、「槐新田」（新田槐戸村）とは本来は七左衛門村、大間野村、越巻村こしまき（現在の新川町）にかけての広大な地域を指していたが、その一番はずれに

8



側面 越谷江 一里

側面 草加江 一里

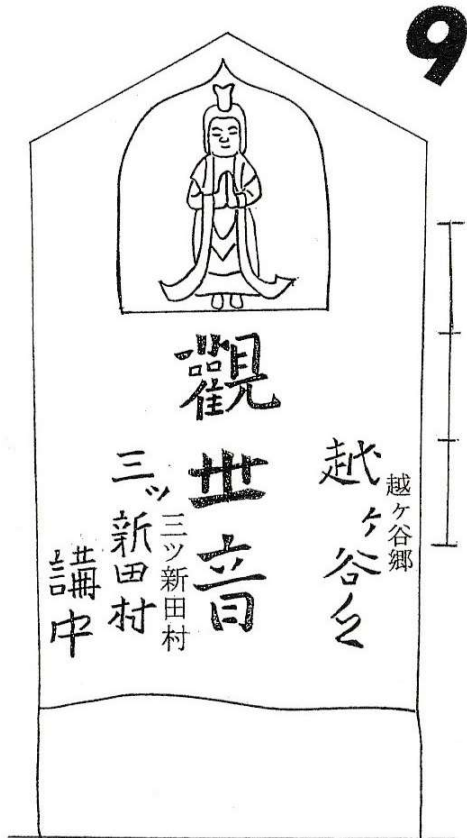
一里

ある越巻村あたりに槐新田という名称が残り、幕末まで呼ばれていたようである。明治の『武蔵国郡村誌』の「越巻村」の項に字地あざちの例として「槐さいからなみき並木」の記述があることから裏付けられる。

なお、地元の古老の間で「サイカチムシ」という言葉がある。カブトムシのことである。綾瀬川沿いにはかつて槐さいからちの木々があり、カブトムシが多く住みついてきたとのことである。江戸時代の『大沢古馬笥』には、槐さいからちは「阜茨」（「さいかし」と読む）と書くべきを誤って「槐えんじゆ」の字を使ったとの説が紹介されている。

9. 谷中やなかにある「三ツ谷やみ」は「三ツ新田しんでん」と「谷中」の二つの名を合併させた地名！

この年代不詳の馬頭観音像の石仏に「三ツ新田村」と刻

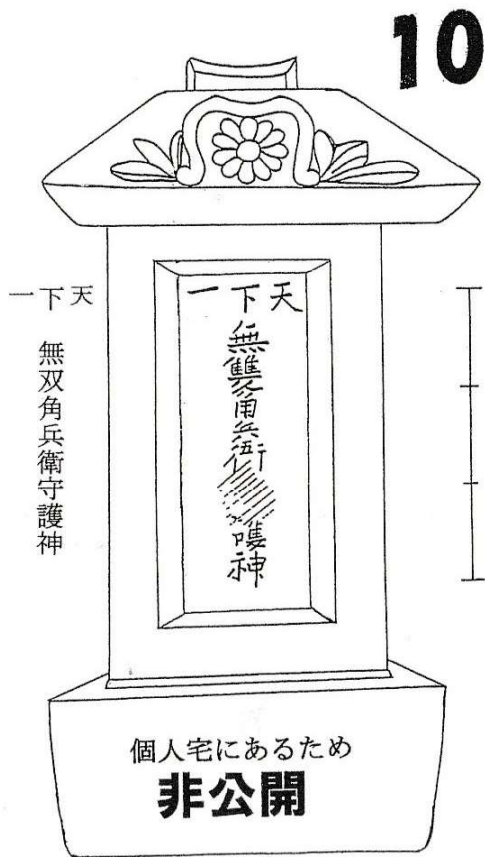


まれていた。谷中村に「三ツ谷」という地域がある。谷中の内の東部の地域で、現在の谷中一丁目にあたる。この「三ツ谷」の地名は、「三ツ新田」の「三ツ」と「谷中」の「谷」から由来した地名であると判明した。

「三ツ新田」は『新編武蔵風土記稿』に「三津新田」との記述がある。古くは越ヶ谷宿によって開発した地域で、『元禄国絵図』では既に谷中村に含まれる。この石仏は「越ヶ谷」の下が「領」（越ヶ谷領）ではなく「郷」（越ヶ谷郷）という中世の名残が見られる古い石仏で、越ヶ谷宿から三津新田村として独立し、更に後に谷中村に属する迄の間に造立したと推定される。

10. 下間久里しもまくりの獅子舞に隣の大里おおさとも参加！

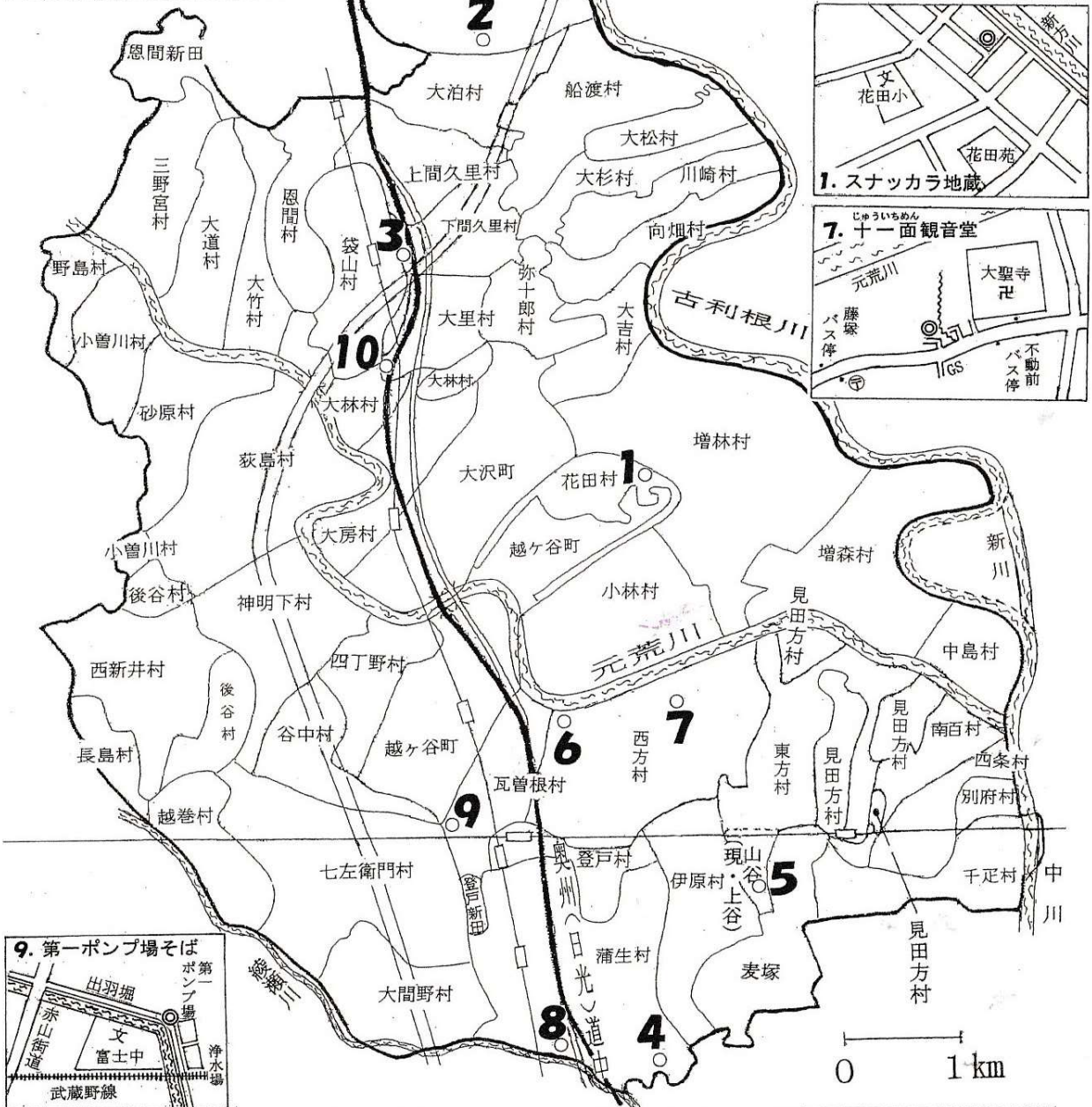
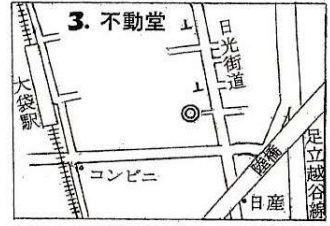
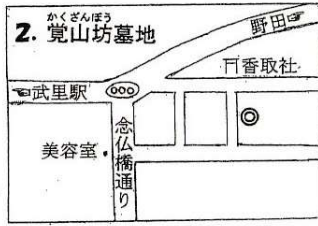
大里の藤田家邸内にある寛政二年（一七九〇）の文字塔



(非公開)に「天下一無双角兵衛守護神」と刻まれている。「無双角兵衛」とは、下間久里の獅子舞の「雨下無双角兵衛」のことで、江戸時代には下間久里の隣の大里の人々も加わっていたことが判明した。その裏付けとして下間久里の新井家所有の「香取大明神御帳」に基づくと三原善太郎氏の調査によると、江戸時代前期の獅子舞の世話人には大里村の村人の名前も見られたとのことである。また江戸時代の獅子舞の太夫は下間久里の新井家が代々受け継いでいたようである。

尚「雨下」とは、「天下」(あめのした)という意味で、その下の「一」が省かれている。

江戸時代の二町四十九ヶ村



0 1 km